11. 名前さがしの旅で……

敦賀市立粟野小学校
６年　森 夏実
↓
各務原市立陵南小学校
６年　伊藤 さやか　石田 明里　大西 果乃莉
橋田 彩名　長谷部 綾華

　ある日、クマの子ルーは、上から落ちてきた雪解け水のしずくで目を覚ましました。両手でぬれた頭をふいて外に出ると、ふきのとうが芽を出して、たくさんの花のつぼみが開く準備をしていました。
「さて、ちょっと早いけど、ミツバチさんにハチミツでも持ってきてくれるように頼んでおこう」
　そのとき、（んっ）と思いました。
「自分の名前、何だったっけ。ハチミツって聞くと、何か思い出せそうな気がするんだけどなあ。とりあえず、ミツバチの木まで行ってみようっと」
　ミツバチの木はアイル森のはずれのすごく広いお花畑の近くにある、大きなうろのある大きな桜の木です。アイル森には、ルーやミツバチの他にウサギとか馬、羊、ヤギなどの住む、ほとんど人間が入ってこないすごくきれいな森です。そんな森をルーはとことこと歩いていきました。
　あちこちの木のてっぺんや道には、まだうっすらと雪が残っていました。その雪も淡い太陽の光でとけ始めているのでした。森のはずれのミツバチの木の近くに着くと、ミツバチを呼びました。しかし、返事はありません。あんまりしつこく呼びすぎると、ブンブンおこって大変なことになるのでやめておきました。そして、ルーは、近くのとうぼくをいすにしてすわりました。
「いいこと考えた」
　と手をたたきました。力を入れすぎて、
「いったあ」
　と飛び上がりました。すると、さっきからメキメキいっていた木がバッキーンとまっぷたつに折れてしまいました。すぐに立ち上がったその時、はっと思い出しました。
「たしか、うちの家のおとなりに、もう一頭くまの子がいたような」
　確かにルーの家のとなりには、くまの子の家がありました。そのくまの子は、ルーの友達のヨーゼフなのに、その名前すら覚えていません。
　しばらくすると、ルーはそのことを思い出し、とことこと歩いてヨーゼフの家に向かいました。ルーはいつもボーッとしてどんくさいけど、腕力はとても強いくまです。
　ヨーゼフの家に着くと、出入り口をノックしました。ルーはものすごい腕力で、ドッスーンとドアをつきやぶってしまいました。中でねむっていたくまの子ヨーゼフは、ひとたまりもありません。あっちのかべにぶつかり、今度はこっちのかべにぶつかり、ド

ッスーンと頭をぶつけて、たんこぶを一つつくってひょっこりと顔を出しました。
　目をこすりながら、
「だあれ？」
「ぼくは、となりの家に住んでいるくまだけど、自分の名前がどうしても思い出せないんだ」
「ふうん。じつはぼくも自分の名前を思い出せないし、君の名前も思い出せないんだ」
「ええっ、どうしよう。とりあえず、家に戻って考えよう」
　そうして、ルーは自分の家に帰って行きました。
　そして、十分後、もう一度合流した二人は、口をそろえて言いました。
「森から出ればいいのでは……」
　しばらくちんもくが続きました。
　そしてぼうけんの準備をするために、もう一度それぞれの家に戻って行きました。
　まず、ハチミツや木の実といった食べ物、ブラシ、麻袋、ひも、そしてまくらまで、昨年サトウキビのせんいであんだ大きなかばんにぎゅうっとつめこみ、ドカッと肩にかけると穴から出ました。
　ヨーゼフと合流すると、アイル森の出口にある門の方へ向かって行きました。花畑を越え、池を越え、橋を渡り、一日かかってようやく中間地点の山の小さな小さなバンガローにたどり着きました。そこで、一晩ぐっすりと眠り、翌朝、また出発しました。
　そして、また丘を越え、どうくつを通り過ぎ、ようやく夕方、赤いれんがづくりの門に到着しました。
　しばらく行くと、森が見えました。その森の深さに二人はぼうっとしてしまいました。
　気がつくと、目の前におばさんのようなくまがいます。そこで、ヨーゼフは、
「あのう」
　と言いました。すると、そのおばさんは、
「分かってるよ。あなた達が自分たちの名を忘れてしまったことも、自分たちの名を聞きに森の外まで出てきてしまったこともね。私は何でも分かるのさ」
　すると、ルーは目を輝かせて、
「じゃあ、ぼくらの名前も知ってるの」
「知ってるとも」
「教えて」
「でも、そうしたら、ぼうけんの意味がないでしょう」
「そうか」
「でも、この地図と少しだけどサケの干物をあげる。あと、このスプレーをかけなさい」
　シュッシュッ……。
　ふわふわ……。
「うわあ」
　二人は、かわいらしい十才ぐらいの男の子と女の子になりました。
「このスプレーも持って行ってね」
　魔法のスプレーと地図を持って、新しいぼうけんへ出発。★
　ルーとヨーゼフは、森をぬけ人間のすむ村へ行くことにしました。村に着くと、ルー

が一軒の家を見つけました。ルーが、
「もう夜だからあの家に一晩泊まろう」
　と言って泊まることにしました。夕ご飯には、持ってきたハチミツや木の実を食べました。
　朝方、まだ寝ていると、誰かが来て、
「そこにいるのはだれだあ」
　と叫びました。その大きな声で目が覚めたルーとヨーゼフは、びっくりしました。なんとそこには大きな男の人が怖い顔をして立っていたのです。
「何をしているんだ。ここはオレん家だぞ」
　と言って、男の人は追い出そうとしました。そのとき、
「やめてよ、お父さん」
　ルーとヨーゼフと同じくらいの年の小さな女の子が、男の人の後ろから出てきました。その女の子はメアリーというやさしい子でした。男の人は、
「しょうがないなあ」
　と言ってゆるしてくれました。メアリーは、
「助かってよかった。あなたたちは何ていう名前なの。私はメアリーっていうの」
　と言いました。
　それを聞いて二人は困ってしまいました。名前を忘れてしまったので言えません。二人は事情を話すことにしました。話を聞いたメアリーは、
「かわいそう。私、力になれるかも知れない。私も一緒に連れて行って」
　と言ったので、いっしょに行くことにしました。男の人は、パワーアップをする薬をくれました。
「がんばれよ」
　男の人に見送られながらヨーゼフとルーとメアリーは元気に出発しました。
　三人がしばらく歩いていくと、大きな屋敷に着きました。でもとても汚い屋敷だったので、きれい好きのメアリーは、
「掃除をしようよ」
　と言いました。ルーとヨーゼフも掃除をすることにしました。
　三人が、ぴかぴかになるまで掃除をしていると、不思議なおじいさんが出てきました。突然出てきたおじいさんに三人は驚きました。
「フォフォフォ。わしの家をきれいにしてくれてありがとう。お礼にこれをあげよう」
　そう言うとおじいさんはどこかへ消えてしまいました。メアリーにはブレスレット、ルーにはかっこいいたて、ヨーゼフには宝石のついた剣でした。ヨーゼフがもらった剣の宝石は、じつは一度だけ願いを叶えてくれるのです。でもそれを知らない三人は、
「えぇー、こんなのもらっても何の役にも立たないよ」
　と言いました。でもせっかくもらった物なので、一応とっておくことにしました。三人は、その屋敷を後にして森の方へ歩いていきました。

「わあっ、何あれ」
　メアリーが言い、二人はびっくりしました。

　なんと怪獣が炎をはいて村の人たちをおそっていたのです。そこにはあの魔法のスプレーをくれたおばあさんのくまもいます。
　何とか助けなきゃ。三人はそう思って怪獣に立ち向かっていきました。でも怪獣は炎をはいています。近づくことは無理です。
　そのときメアリーはぴんと来ました。三人がもらった道具です。
「たてで身を守ろう」
　三人はたてで、身を守りながら怪獣に近づいていきました。そして剣で怪獣の足をつつきました。
「グオォーー」
　と怪獣が上を向きながら鳴きました。その隙に三人は剣を持って怪獣をつきさしました。すると、怪獣はきえました。
　パチパチパチパチ。
　どこからか手をたたく音が聞こえました。なんと、あのおばあさんではありませんか。
「合格だよ」
「えっ……」
「私は、あなたたちが一人前のクマになれるか試したの。最初は心配だったけど、仲間を信頼してすばらしかったよ」
　とわけを話してくれました。そして、おばあさんはルーとヨーゼフに名前を教えました。
「それとね、あの剣は一つだけ願いが叶うんだよ。三人で好きに使いなさい」
　そう言って、おばあさんはどこかへ行ってしまいました。
　おばあさんからもらったスプレーで、ルーとヨーゼフはくまにもどりましたが、二ひきと一人の友情は変わりません。
　二ひきと一人は、一生友だちでいられるよう剣にお願いしました。